

扶桑蒸奇譚・逸聞

鶴退治

氷雨亭



傾いた日差しがじりじりと肌を焼く、大正三十一年の夏の日だった。

空中蒸気鉄道が黒煙を吐き出しながら過ぎていくその下方に、解体されないまま放置された廃工房が雑然と並んでいる。工房によつてはコンテナやもう使えない蒸気機械や資材がそのままになっていて、体力を持て余した悪童共にとつては格好の遊び場になっていた。しかも大人はたまに警らの捜査官がやってくるかどうかとくれば、人目をはばかる遊びにもうってつけだ。

「ほらはやく行けよ！」

「逃したらしょーちしねえぞ！」

年の頃は十一か十二といったところだろうか。数人の悪童どもが、立入禁止を示すテープの向こうにぎやあぎやあとわめいている。

その視線と声の先、錆びついた扉が半分ほど口を開けた廃工房の入り口を少し入ったところに、彼らと同じくらいの年齢好の少年が居た。

「む、むりだよ……」

三白眼を力なく垂れさせて、少年は工房とテープの向こうの面々とを見比べる。夕暮れ時の廃工房は半ば影に沈んでいて、不気味な静けさを漂わせている。中に入れただけでも大したものだ。

「とろとろしてる間に逃げたらどーすんだよ！」

悪童の一人が足元の小石を拾い上げ、少年に向かって投げつけた。顔をかばった腕に命中し、少年がその痛みにもうめく。

「で、でも……こんなとこに居るわけないよ」

機械の犬だか猫だか熊だったか、とにかくそんな感じのものをここで見た。だから捕まえてこい、というのが悪童たちの命令だった。

蒸気技術の発展目覚ましいこの時代、動物型の蒸気人形の存在自体は珍しくない。しかしそれは「登録された主人の後を忠実に追いかけてくる」とか「敷地内に入ってきた不審者を攻撃する」とか、ある程度決まった行動を取るだけのものだ。こんな場所を野良の犬猫のように、好き勝手にうろついているはずがない。

「うるせーな！ とつとつといけよ！」

「淳之介おめー、つかまえらんなかったらぶんなぐるからな！」

いつまで経っても進まない淳之介に業を煮やし、悪童たちが石やら錆びついたネジやらを投げ始める。まあ彼らにとつては居るか居ないか、捕まえられるかどうかはどうでもいいのだ。弱っちくてとろくさいヤツのみじめな姿を見て、スカッとしただけなのだから。

「うう……っ」

淳之介の三白眼に、じわりと涙がにじんだ。ほとんど引きずるような重たい足取りで、奥に向かって一歩踏み出す。

その時だった。

「お前ら何やってんだ！」

急に吹きつけた爽やかな風に乗って、凜とした声が響き渡った。

力強くも軽快な足音がそれに続いて、一人の小柄な少女が姿を現した。青紫の着物に女袴を翻し、白いリボンで右の片尻尾に結わえた髪を風に踊らせる。傷だらけの編み上げブーツで地面を蹴ると、少女は自分の背丈よりも遥かに高く跳んだ。その勢いのまま悪童たちの最後尾を背中から蹴っ飛ばし、その反動を使ってきれいに着地すらしてみせる。

げ、と。悪童どもが苦々しげに表情を歪めた。

「り、竜胆……！」

肩にかかった黒髪を手で払い、竜胆は彼らを鋭くねめつける。ただそれだけで悪童どもは怯み、そしてほとんど一斉にその場から逃げだした。背中を蹴飛ばされたヤツも慌てて起き上がり、その後にくく。

「つくしよ、淳之介てめー覚えてろよ！」

「そこは私の名前にしとけよ」

彼らが捨て台詞を残していなくなったのを確かめると、竜胆はテープを飛び越えて淳之介のもとへ歩み寄ってくる。

「淳、だいじょーぶか？」

鮮やかな登場にぽかんと見とれていた淳之介は、慌てて涙を袖でぬぐった。大丈夫と言い

かけて、額の痛みに顔をしかめる。反射的に隠そうとした手は竜胆につかまれた。そのままぐつと顔を寄せてくる。

涼やかな印象の切れ長の瞳に、はちみつを溶かした牛乳みたく滑らかで血色の良い肌、そして桜色の唇が無防備なくらい間近に迫って淳之介は顔が熱くなるのを感じた。

対して竜胆の視線は、淳之介の額に向けられていた。やがて淡い黒をした瞳がキツとつりあがる。悪童どもが逃げた方をにらんで唸った。

「あいづら、明日会ったらただじゃおかん」

「りんちゃん、そんなのいいよ」

「いいやよくない。あいづら淳がおとなしいからって好き勝手しやがって！」

小柄で華奢な肩をいからせ、竜胆は我が事のように憤慨する。その怒りを表現するように、片尻尾がぶんぶん揺れていた。

そんな彼女を見ているだけで、淳之介は額の痛みがやわらぐ気がした。この幼馴染はいつもこうだ。気弱な淳之介がまわりにいじめられていると、風のように現れてはいじめつ子を蹴散らして、淳之介本人よりもよほど真剣に怒ってくれる。そんな彼女が、彼は大好きだった。

「とりあえず帰るぞ。そしたらおでこの手当てしてやる」

「うん」

さつきつかんだ手はそのままに、竜胆が先に立って歩き出す。歩くのにあわせて微かに揺

れる片尻尾を見つめながら、淳之介はその後ろをついていく。

その耳に、ヒョウと鳴く声が聞こえた気がした。

その直後、足元に何かが落ちてくる。靴にあたって跳ね返ったそれは、錆びたネジやナットの類だった。

廃工房の天井を仰ぎ見る。それに気付いた竜胆が立ち止まり、同じように天井に視線を向けた。

「え」

二人の視界いっぱい、落ちてくる鉄骨が映っていた。

瞬間、淳之介は竜胆の手を振り払っていた。そのまま彼女を入り口の方へ突き飛ばす。自分よりも強いはずの竜胆を突き飛ばすのは、思っていたよりもずっと簡単だった。

「淳！」

真つ青な顔で目を見開いた竜胆が、ほとんど悲鳴のような声と共に手を伸ばす。

錆びの浮いた鉄の塊に視界を遮られ、淳之介の意識はそこで途切れた。